資料③　ゆふぐれしづかに

I Love to Steal Awhile Away

Phoebe. H. Brown 作詞
植村正久 訳

1．ゆふぐれしづかに
いのりせんとて
よのわづらひより
しばしのがる

2．かみよりほかには
きくものなき
木かげにひれふし
つみをくいぬ

3．すぎこしめぐみを
おもひつづけ
いよゝゆくすゑの
さちをぞねがふ

4．うれひもなやみも
わたみかみに
まかすることをぞ
よろこびとせん

5．見にしみわたれる
ゆふくれどきの
えならぬけしきを
いかでわすれん

6．このよのつとめの
をはらんその日
いまはのときにも
かくてあらなん

『新撰讃美歌』

逃げ水 『若菜集』

島崎藤村

ゆふぐれしづかに
ゆめみんとて
よのわづらひより
しばしのがる

きみよりほかには
しるものなき
花かげにゆきて
こひを泣きぬ

すぎしゆめぢを
おもひみるに
こひこそつみなれ
つみこそこひ

いのりもつとめも
このつみゆゑ
たのしきそのへと
われはゆかじ

なつかし君と
手をたづさへ
くらき冥府までも
かけりゆかん

作詞者のブラウン夫人（1783-1861）は、S.R.ブラウン宣教師（1810-1880）の母親。S.R.ブラウンは、アメリカでの牧会、マカオ伝道の後、1859年に来日、第１回宣教会議の議長、新約聖書翻訳委員会の長を務めた。ブラウン塾では植村正久（1858-1925）等、多くのキリスト教指導者を育てた。

この詞が書かれたのは彼が８才の頃。夫人は当時、病気の妹と４人の子どもを抱えて貧しく、家には祈る場所もなかった。夕方になると、近くの屋敷の庭に行き、その木の下で祈っていたが、ある日、そのことを屋敷の女主人に強くとがめられた。その木の実がよく盗まれたので疑われたとも言われる。深く傷ついた夫人は、子どもたちが寝静まった後、台所で泣きながらこの詞を書いたという。この詞は最初「ある婦人に宛てた私の夕の散歩のお詫び。1818年8月」という題が付けられたが、後に初行の "I love to steal awhile away" の名で愛唱されるようになった。

植村正久はこの訳詞を『女学雑誌』第六十七号（1887）に発表、後に『新撰讃美歌』（1888/90）に収録している。島崎藤村（1872-1943）は、これを恋愛詩に換骨奪胎して『逃げ水』という題（後に『ゆふぐれしづかに』と改題）で 処女詩集『若菜集』（1897）に収録した。『讃美歌』（1954）は、植村訳に若干手を加え「わずらわしき世をしばし逃れ」（319番）として収録している。『教会福音讃美歌』では、植村訳を尊重しつつ新しい翻訳で収録した（374番）。

『新撰讃美歌』（『讃美歌研究』斎藤勇による）

明治20年代の詩壇の主潮を形成していく青年詩人たちに刺激を与えたのは『新体詩抄』ではなく、『新撰讃美歌』『小学唱歌集』『於母影』の三つ、特に『新撰讃美歌』と『於母影』である。

新体詩

明治期に作られた文語定型詩の形。主に五七調や七五調が基調。

『新体詩抄』（1882）井上哲次郎、外山正一、矢田部良吉
『於母影』　（1889）森鴎外らによる訳詩集
『若菜集』　（1897）島崎藤村

新体詩の特徴（『日本現代史大系』山宮充による）

自由長大なる詩形　　新時代の複雑な思想感情の表現
用語の範囲の拡大　　庶民に理解
花鳥風月的在来の詩的題材以外　広く人生の事象中より自由に取材